第 22 回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

秀 作

# 水槽を満たすお金

石川県・金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校　2 年　松尾　奈夏

のとじま水族館へのクラウドファンディングで総額3,138万円もの寄金が集まった[1)]。「温かいお金」は確かに存在していたのだ、この記事を見てそう思った。

私は、リーマンショックと共に生まれてきた。急速な景気後退に伴い、多くの人が職を失った。人々は金を使いたがらなくなっていったのだ[2)]。私は、コロナ禍の完全に凍り付いた経済を見て中学時代を過ごした。次々とシャッターがおろされる商店街。未知のウイルスに怯(おび)え、身も金も部屋にしまいこむ日々。日本の失われた30年しか知らない私は、経済と人の交流がどうも結びつかなかった。私にとって金とは常に「生きるための武器」でしかなかった。

しかしこれは、どうやら私に限った話ではないらしい。この頃「コスパ」という言葉を以前にも増して聞くようになった。より少ない金額でより多くの効果を、という理念のもと生まれた言葉だが、この「効果」というのも、近年限定的になっている気がする。特に若者の間で。それに気が付いたのは、将来子育てをする気は無い、と自慢げに言ってのけた友人の言葉だった。

「子育てはコスパ悪いから」

コストに対するパフォーマンスとして実用性を、すなわち自分に直接関係のある利益を求めるようになっている。また、もう一つ私が目を疑ったものがある。それが、小学４年生から６年生に対する、将来の夢に関するアンケートだ[3)]。「お金持ちになりたい」。そう願う小学生は年々増え続け、2023年には83.5％に及んだ。まだ小学校高学年の子供たちが、将来の大人になった自分より、金に希望を見出しているのだ。夢、と聞かれたがためにお金持ちという言葉を出しただけで、幼い彼らの希望は沢山の金を使うこと、つまり豪遊だろう。終わりの見えない我慢の時代がこのような願いを生んだのだろうか。今や誰もが、いかに自分が得をするか、で金の使いどころを見極めている。

いや、これは日本に限った話ですらない。世界中が金を手に取り、水面下の

©J-FLEC2024

経済戦争を始めている。それが如実に現れたのがコロナ禍だったように思う。未知のウイルスが世界を侵略する、というのは小説にありがちなテーマだ。これが現実で起こってしまった訳だが。そして、小説では大概、遥(はる)かに強大な敵が現れると各国が己の利益を超え、国際協力を実現させるものだ。これが現実には起こらなかった訳だが。各国は時に他国を痛烈に批判し、自国を守ることを最優先にした。それどころか、新聞によればワクチン外交と呼ばれるワクチンを利用した経済政策で、他国を圧迫する国もでた[4)]。コロナに苦しむ人々の命が、ワクチンの生む経済的な利益と天秤(びん)にかけられた瞬間だった。最近では大国が戦争をはじめ、もはや国際協力など幻想のような気がした。未だ貧困に喘(あえ)ぐ国、急速に発展し付近の途上国を蝕(むしば)む国、強大すぎる生産力と経済力を武器に国家間のつながりを断ってまで戦争をする国。それらを取り巻く、自分を優位に見せるための金、相手を攻撃するための金。何とも言えないやるせなさを、「資本主義の世の中だから」という理屈で飲み込んだ。個の幸福と一対一対応した、「冷たいカネ」ばかりがニュースや市場に出回っている気がした。

そんな中、能登半島地震が起きた。よりにもよって正月を選ぶとは、自然さえも無慈悲だ。県内で起こった地震であり、自分も揺れを経験したが、大災害だ、という現実感は中々湧かなかった。しかし、正月から約１週間後、一つのニュースを見て、一気にその悲惨さを思い知った。のとじま水族館で２匹のジンベイザメが死亡。「ああ、この水族館は終わってしまうのかもしれない」。呆(ぼう)然とそう感じた。石川県民として、のとじま水族館は何度か訪れたことがあった。ゆったりと揺蕩(たゆた)う水の中を、一切の抵抗を感じさせず泳ぐ魚たちを見ていると心が穏やかになった。その穏やかな青い世界の象徴が2匹のジンベイザメだった。その悠然と泳ぐ姿に、私含め多くの人が魅了されていた。ロゴや大きなモニュメントは全てジンベイザメを象っていた。のとじま水族館は象徴を失ったのだ。様々な設備が損壊した水族館の修繕費は優に数十億に上るという[5)]。再起は不可能に思えた。

しかし、のとじま水族館は息を吹き返した。クラウドファンディングや募金で多額の支援金や応援物資が集まったのだ。それは、生き物のためか、被災した地域のためか。どちらにせよ、完全なる「思いやり」としての金の使い方だ。「温かいお金」は理想論ではなかったのか。大きな数字が私の目を覚ました。

©J-FLEC2024

そして、頭によぎった中学生のときの授業。経済システムの成り立ちについての授業だった。米を作っていた農民は、稲作に手一杯で他のことをする余裕がなかった。技術力の向上により、人間の可能性は広がったものの、一人で出来ることには限界があったのだ。そこで、各々が得意なものに専念することで補いあい、分業と通貨による取引で暮らすようになった。経済の確立だ。これによって生活水準は著しく向上したのだ。

経済とは、総体としての効率化を目的とした、「助け合い」のシステム。ここに国際分業の目指す姿がある気がした。国際分業とは、半導体で世界の実権を握ることではない。自国の得意分野で、他国の苦手分野を補い、世界共同体を包括して発展を目指すことのはずだ。非現実的な理想論ではない、と私は信じている。金が絡んでも、人は他者を思いやることが出来る。傷ついた水族館に寄せられた支援がそれを証明していると思う。

災害だらけの日本。確執が深まる世界。有機的な助け合いの経済が、「温かいお金」が、未来へのカギになるのかもしれない。私は、その希望の象徴をのとじま水族館に見た。だからこそ、今後そんな経済の実現に一役を買いたいと感じた。円安、株価の暴落、経済制裁。金に関する話題が暗いものばかりにならないよう、私に出来ることを模索したい。

ジンベイザメのいなくなった水槽は、明らかにガラガラだった。それでも、胸がいっぱいになるほどの「温かいお金」はそこに確かに満ちていたのだ。

（注）

1）日本水族館協会「御礼：「『のとじま水族館』の生き物の命を守る共同支援活動を継続するためのクラウドファンディング」終了しました」
URL　https://www.j-aqua.org/2024/05/10/801/
閲覧日　2024年9月9日

2）内閣府「第1章　急速な景気後退に陥った日本経済　第4節」
URL　https://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je09/09b01040.html
閲覧日　2024年9月9日

3）Benesse「『夢を持て』は逆効果？子どもの《職業観》、保護者世代との違いで意識すべきこと」
URL　https://benesse.jp/kyouiku_trends/202406/20240625-1.html
閲覧日　2024年9月10日

4）朝日新聞「米中競う『ワクチン外交』、宣伝控える日本『批判が…』」
URL　https://www.asahi.com/articles/ASP876FV7P86ULFA020.html
閲覧日　2024年9月11日

©J-FLEC2024

5）日本経済新聞「水族館に『2020年問題』改修100億円超の例も」
URL　https://www.nikkei.com/article/DGXNZO13224730R20C10A8ML0000/
閲覧日　2024年9月11日

©J-FLEC2024